待つ　　太宰治

教材のねらい

1　選定の理由

「待つ」は、戦争が一人の若い女性の心持ちや生き方に影響を及ぼす過程と顛末を、巧みな語りで伝えていく一人称小説である。太宰は創作活動の中期あたりから女性独白体の作品を発表し続け、男性中心的な語りとは異なる領域に光を当てた。本作は「京都帝国大学新聞」からの依頼だったが時局にふさわしくないという理由で未掲載となり、自著「女性」の巻末に収録して世に問うている。末尾に「(十七年一月)」とあり、アメリカとの戦争が始まった直後の社会の雰囲気に鋭く迫っており、近代２の課題にふさわしい教材として選んだ。

主人公の「私」は、周囲との儀礼的なつきあいに違和感を持ち、母との親密な関係性を大切にして暮らしていたが、「大戦争」が始まり、やるべきことを画一化していく周囲の雰囲気に、不安と孤独を感じるようになる。時代の趨勢に飲み込まれそうになりながらも、しかし「私」は何かを待つという希望を抱き、いつ終わるとも分からない戦争状態を生き延びようとする。「私」は待つ対象について否定を繰り返しながら、結末では読者を含むような「あなた」に直接呼びかける。自由な行動や表現が制限されつつある時代に作家が試みた声なき読者との幽かな連帯の可能性について考えてみたい。

2　指導のねらい

まずは作家に還元しない多角的な視点で、作品を丁寧に読んでいく必要がある。時代状況を丁寧に掘り起こし、「私」の心的葛藤の表れであろう言い直しや長短の文章の繰り返しを読み解くことで、初めて「私」や戦時下の作家の希望の内実は浮かび上がる。孤立した存在や少数者の声の連帯の可能性について生徒たちと共有できるように、「あなた」の重要性を取りこぼさないようにしたい。

(1) 主人公が感じてきた違和感や不安について、「大戦争」が始まる前と後でそれぞれまとめて比較する。

(2) 「大戦争」が主人公の言葉選びにどのような影響を及ぼしているのか分析する。

(3) 主人公が待つものの変遷を丁寧に追うことで、その希望の内実について考えを深める。

(4) 「あなた」に呼びかける意味を検討し、読者側から作品を主体的に捉え返す。

3 評価規準

(1) 言葉には、文化の継承、発展、創造を支える働きがあることを理解している。〔知・技〕(1)ア
(2) 常用漢字の読みに慣れ、主な常用漢字を書き、文や文章の中で使っている。〔知・技〕(1)イ
(3) 我が国の言語文化に特徴的な語句の量を増し、それらの文化的背景について理解を深め、語感を磨き語彙を豊かにしている。〔知・技〕(1)ウ
(4) 文章の意味は、文脈の中で形成されることを理解している。〔知・技〕(1)エ
(5) 我が国の言語文化の特質について理解している。〔知・技〕(2)ア
(6) 「読むこと」において、文章の種類を踏まえて、内容や構成、展開などについて叙述を基に的確に捉えている。〔思・判・表〕B(1)ア
(7) 「読むこと」において、作品に表れているものの見方、感じ方、考え方を捉え、内容を解釈している。〔思・判・表〕B(1)イ
(8) 「読むこと」において、文章の構成や展開、表現の仕方、表現の特色について評価している。〔思・判・表〕B(1)ウ
(9) 「読むこと」において、作品の成立した背景や他の作品などとの関係を踏まえ、内容の解釈を深めている。〔思・判・表〕B(1)エ
(10) 進んで小説の表現の仕方・特色をつかみ、成立した時代や背景などさまざまな角度から作品を考え、学習課題に沿って、「私」が待っているものについて考えようとしている。〔主体的に学習に取り組む態度〕